

復活節第3主日礼拝説教「あなたの命の隠されたところ」予稿
日本基督教団石神井教会 2025年5月4日

【旧約聖書日課】列王記上 17章17～24節

¹⁷その後、この家の女主人である彼女の息子が病気にかった。病状は非常に重く、ついに息を引き取った。¹⁸彼女はエリヤに言った。「神の人よ、あなたはわたしにどんなかわりがあるのでしょうか。あなたはわたしに罪を思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」¹⁹エリヤは、「あなたの息子をよこさない」と言って、彼女のふところから息子を受け取り、自分のいる階上の部屋に抱いて行って寝台に寝かせた。²⁰彼は主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、あなたは、わたしが身を寄せているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息子の命をお取りになるのですか。」²¹彼は子供の上に三度身を重ねてから、また主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命を元に戻してください。」²²主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子供は生き返った。²³エリヤは、その子を連れて家の階上の部屋から降りて来て、母親に渡し、「見なさい。あなたの息子は生きています」と言った。²⁴女はエリヤに言った。「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です。」

【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙 3章1～11節

¹さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。²上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。³あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。⁴あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。⁵だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。⁶これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。⁷あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。⁸今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。⁹互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、¹⁰造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。¹¹そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです。

【福音書日課】 マタイによる福音書 12章38～42節

³⁸すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。³⁹イエスはお答えになった。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。⁴⁰つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中になることとなる。⁴¹ニネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。⁴²また、南の国の女王は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまさるものがある。」

キリストと共に復活！【こども説教のために】

主イエスのご復活を祝った「復活祭（イースター）」から三週目の日曜日の今日も、わたしたちは、ご復活の主イエスを記念し、お会いするために集まっています。今日までではなく、日曜日にはいつも、ご復活の主イエスを記念し、お会いするために集まり続けるのです。

主イエスを記念し、その教えを聞き、従って行こうとする者たちの教会で、わたしたちは、ご復活の主イエスとお会いします。それは、不思議なことです。最初のイースターを祝った弟子たちにとっても、不思議なことでした。

ある弟子たちは、皆で食事を共にするとき、そこにご復活の主イエスがおいでくださり、お会いくださっていることに気づいたと言います。食事は、主イエスと旅をしてきた弟子たちにとって、日常生活そのものでした。ただ、主イエスが本当に大切にされていたことでした。ご復活の後、弟子たちは、互いに集まり、食事をする中に、主イエスがおいでくださっている、お会いくださっていると、確かに気づかされるようになりました。それは、不思議な感覚でした。弟子たちは、ご復活の主とお会いするとき、自分たちも**キリストと共に復活させられている**と気づかされるようになっていったのです。

ご復活の主イエスとお会いするようになった弟子たちは、ご復活の主と共に毎日の生活を生きていく者たちとなりました。弟子たちの教会で、使徒パウロは、**上にあるものを求め、上にあるものを心に留めて**生きていくようにと勧めました。ご復活のキリストが神の右の座に着いていらっしゃるように、ご復活のキリストと共に生きる者は、日々の生活を送りながら、心は神のすぐ近くにまで高く上げて歩むのです。天の御父に倣う神の子として生きるのです。今はそれにふさわしい姿でなくても、主イエスの御言葉や御業を身に着けて、神の子と呼ばれるにふさわしい者となることを目指して歩むのです。

キリストと共に復活

先週、わたしたちの教会が属する北支区の会議があり、四谷の教会に牧師、信徒十人ほどが集まる機会がありました。その折に、皆で教会の礼拝堂を見学させていただいてきました。その礼拝堂には、わたしたちの教団の教会では必ずしもどこにでもあるわけではない、特別な設備が備えられていたからです。

聖壇の奥に、木の板が何枚も並べられています。そこを開けると、銭湯の浴槽のような設備が現れるのです。実際、水とお湯の出る水栓、そして排水口も設けられています。「洗礼槽」などと呼ばれる設備です。その教会では、洗礼式を、この洗礼槽で行うのです。受洗者と司式者は、特別な洗礼着を身に付けて、水の溜められたこの洗礼槽の中に入って行き、そこで実際に水の中に沈められながら洗礼を受けます。受ける者も大変ですが、司式者も大変です。けれども、それは受洗者にとっては忘れがたい経験になるのでしょうか。

このような洗礼槽の設備は、バプテストと呼ばれる教派の伝統を持つ教会などを中心に設けられています。わたしたちの教会の伝統では、頭に水を注ぐだけの方法で洗礼が執り行われますが、実のところ非常に古い伝統では、洗礼槽が教会堂に設けられている例は少なくないのです。この全身を水に浸からせる洗礼の様子を伝える古代教会の記録も、少なくありません。志願者は、それまで身に付けていた衣服を脱ぎ捨てて、ほぼ裸で水の中に入り、水中に沈められ、そして引き上げられると、真新しい白い衣を着せてもらうのです。それは、使徒パウロが教えるように、「**古い人をその行いと共に脱ぎ捨て…新しい人を身に着け**」ることを意味したのです。

パウロは、別の箇所では、「**洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ている**」(ガラ 3:27)とも教えています。洗礼を受けた者は、「**新しい人**」すなわち「**キリスト**」を、上から着せていただいているのだ、と言うのです。もちろん、上っ面を真似ればよいということではないでしょう。それでも、まずは真似ること、倣うことから始まるのです。

外形から始め、型に合わせることから始めても、その人は、**日々新たにされる**のでしょうか。パウロは、もちろん、そうだと言います。なぜなら、洗礼によってキリストと結ばれた者は、キリスト共に死に、**キリストと共に復活させられた者**だから。それが、パウロの答えです。

キリストのご復活を祝う教会は、わたしたち自身の復活を祝ってもいるのです。すべての人の復活を祝おうとしているのです。すべての人が、復活の命のうちに回復されることを願い、祝おうとしているのです。そうであればこそ、教会は、洗礼を祝います。自分自身の洗礼以上に、新たに加えられる人の洗礼を、何よりも喜び、祝うのです。

養われ、命与えられる

キリストのご復活は、弟子たちが経験したことです。ご復活の主とお会いしたのは、弟子たちです。他の誰かではありません。主イエスが葬られたはずの墓を見張っていた番兵たちは、ご復活の主とお会いすることはありませんでした。主イエスを葬り去ろうとした多くの人々の前に、ご復活の主が現れられることも、ありませんでした。けれども、弟子たちを責め、葬り去ろうとした、あのパウロの前には、ご復活の主は現れられました。

復活は、何か客観的な観察者が記録できるような現象ではありません。それは、だれかの失われた者がその人のもとに取り戻され、だれかのもとで死んだ者がその人のもとに回復されることです。キリストがご復活なさったとき、キリストは、弟子たちのもとに取り戻されました。回復されました。それは、逆に言えば、弟子たちがキリストのもとに取り戻され、回復されたことでもあるのです。

旧約の預言者エリヤは、神に命じられて、イスラエルの地に飢饉をもたらす預言を告げました。飢饉の中、エリヤは、神が鳥に運ばせたパンと肉を得ることができていました。ところが、神は、そこから異国の地、シドンのサレプタにエリヤを行かせられたのです。そこには、明日のパンを得られないようなやもめ親子がいました。神は、「**そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる**」(王上 17:8) と命じられたのです。そう命じられて、エリヤは、パンと肉を確実に得られていた生活から引き剥がされて、何も持たず、明日にも命が尽きるかもしれないやもめ親子の家に身を委ねたのです。エリヤは、その家に尽きることのないパンをもたらしました。そればかりか、その家の息子が病で死んだときには、その子を生き返らせることさえしました。

やもめにとっては、エリヤは命の恩人です。生き返った息子を返された母親は、エリヤに言いました、「**あなたはまことに神の人です**」と。やもめ親子は、預言者によって、命救われ、また失われかけた命を取り戻してもらったのです。この親子は、いわば復活させられたのです。けれども、この出来事を通して復活させられたのは、この親子だけではありません。エリヤもまた、復活させられたのです。死の家に行かされて、しかし、そこで養われ、この親子と命の交わりを重ねました。その息子の死を激しく悼み、神に叫んで願う者となっていました。その子を取り戻されたとき、エリヤも取り戻されたのです。命を取り戻し、その親子との交わりを回復したのです。

わたしたちは、互いに復活させられるのです。ご復活のキリストが弟子たちを復活させてくださったように、わたしたちも、復活させられた者の集いに加えられているのです。これ以上のしるしは、必要ありません。